

てウイルス分離を行い、うち4例については追跡分離を行った。17検体中ウイルスは13検体より分離され、12例中9例よりウイルスの排出を認めた。この12例中5例より極めて多量のウイルスが排出されており6,000 pfu/ml に及ぶものもあった。20～100 pfu/ml の中等量のウイルス排出は4例に認められ、3例からはウイルス排出を認めなかった。追跡成績を得た4例中2例は多量の排出を続け、1例は急速に減少、1例は持続的少量排出にとどまった。すなわち NH では CMV の関与するところが大きく、12例中9例に中等量以上のウイルス排出が認められた(表2)。

3. その他の乳児肝疾患5例から新鮮尿を得てウイルス分離を行い、全例にウイルス排出を認めた。1例は総胆管囊腫であり、他は肝機能障害2例、肝脾腫2例で、後4例は確定診断前の症例であるが肝炎の可能性が大きい(表3)。

4. 経過を追跡した新生児肝炎は妊娠38週で出生(S. 53. 4. 5)し、生下時体重2,200 gr、出生直後より全身に散在する米粒大発疹あり、肝脾とも1.5 cm 触知。高知市の某病院に入院したが、S. 53. 7. 22、東京 K 病院へ転院。この間5月中旬まで37.5～38.0 °Cが続いたが、体重増加並びに哺乳量は正常、発疹は色素沈着、褪

色傾向、小出血斑状となったが7月には消失した。肝脾腫も一時それぞれ3 cm、5 cm であったが次第に縮小した。血液化学検査ではビリルビン値、LDH、LAP、ALP、GOT、GPTなどに異常高値が続いたが、8月下旬には正常値に近付いた。尿中ウイルス排出量は生後5、6カ月時がそれぞれ5,760 pfu/ml、3,200 pfu/ml であったが次第に減少し、7カ月以降は600～800 pfu/ml であった。CMV 補体結合抗体価は生後6カ月時がピークで1:128であった。また患児血清 IgM 中に CMV を認めた。

〔結論〕

1. 先天性胆道閉鎖症8例よりサイトメガロウイルス分離を行い、1例に多量のウイルス排出、2例に極めて少量の排出を認め、5例には認められなかった。
2. 新生児肝炎12例のうち、5例に多量のウイルス排出、4例に中等量の排出を認め、3例には認められなかった。
3. その他の肝疾患より種々の程度のウイルス排出を認めた。
4. 新生児サイトメガロウイルス肝炎のウイルス排出、血中抗体価を追跡した。

CBAの成因に関する実験的研究 —家兔胎児へのリトコール酸静注の影響—

筑波大学小児外科 澤 口 重 徳
菅 沼 靖
同実験動物センター 古 川 敏 紀

胆汁酸成分の1つである Lithocolic Acid (以下 LA とする)の肝毒性についての HORRALL および HOLSTI の報告以来、CBA の成因の1つとして LA は注目されている。しかし、その実験系からこの成因論を詳細に検討した報告は未だない。今回我々は妊娠家兔に LA を投与し、その影響について病理組織学的に検討を行なった。

〔実験材料および方法〕

一定量の LA が家兔へ確実に投与されることを目的

として、投与経路は静脈内投与とした。ここで LA の溶媒として、トリエタノールアミン (以下 TEA) および β -シクロデキストリン (β -CD) を起用した。実験群は LA の投与量 (42.5 μ g/kg, 85 μ g/kg, 425 μ g/kg, 8.5 mg/kg) により5群に分け、また対象群として溶媒の TEA および β -CD の投与を行なう Pos. Control 群、さらに Neg. Control 群を設定した。家兔は交配後7日目より連日3週間、耳静脈内にそれぞれ注入を行なった。交配後31ないし35日目の間に家兔は全例出産した。

家兔新生児は分娩後1日、7日、14日目にそれぞれ殺処分を行ない、親家兔は分娩後14日目に処分し、病理組織学的検査に供した。組織採取部位は肝右葉・左葉、肝門部および胆管中部とし、10%中性緩衝ホルマリン液および凍結により固定を行ない、H・E, PAS, ビリルビン、脂肪、Al-p の各染色を施した。

〔成績〕

親家兔：85および425 μ g/kg 投与群で肝細胞内空胞がわずかに認められ、8.5mg/kg 投与群では肝細胞壊死および中等度のPAS陽性空胞がみられた。

新生家兔：分娩後1日目の新生児肝では全例細胞内空胞が強度に認められたが、脂肪染色陽性であり、LAの影響はみられなかった。しかしAl-p染色で425 μ g/kgおよび8.5mg/kg群の肝組織にGranulocyteを多数認

め、また8.5mg/kg投与群の1例にPAS中等度陽性の例をみた。しかし分娩後14日目の同腹仔では、同顆粒は正常量で、他にこのような所見は認められなかった。肝内胆管はLAの投与量が増すに従って、その量が増加する傾向にあったが、肝内胆管壁細胞に著変はみられず、また8.5mg/kg投与群の分娩後1日目の肝細胞にみられた肝細胞の強度の破壊像も同腹仔14日目の肝には同様所見を認め得なかった。ビリルビン染色では親家兔も含め全例に同顆粒の陽性例をみなかった。

〔結論〕

本実験の結果、リトコール酸の胎児肝におよぼす影響は、①肝細胞毒としてのその破壊、②肝内胆管の増生を認めたが、CBAにみられる特徴的所見は認められなかった。

Alpha-fetoprotein (AFP) in vitro の抗体産生抑制作用について

帝京大学小児科 吉 野 加 津 哉
伊 東 繁
沖 津 祥 子
柱 新 太 郎
橋 本 剛 太 郎
藤 井 良 知

I. はじめに

新生児肝炎(NH)、先天性胆道閉鎖(CBA)において血中 α -fetoprotein (AFP)が高値をとることの意義づけは未だ明確ではない。急性肝細胞疾患、あるいは慢性活動性肝炎の患者リンパ球は、ウサギ肝細胞に対して強い細胞傷害作用をもつという¹⁾。このことは、これらの肝疾患においてはKiller活性あるいはHelper活性が亢進している可能性を示唆している。AFPが高濃度に出現するという現象は、細胞性免疫能の異常亢進を抑制するための目的的な働きなのかも知れない。我々は過去においてAFPの免疫抑制作用をリンパ球の幼若化、MLRなどにおいて検討してきたが、その作用機序は不明であった。今回、我々は抗ウサギ赤血球溶血斑形

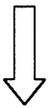
成反応(抗SRBC CPFC)法を用いて、AFP感作T μ あるいはT γ 細胞の溶血斑形成反応への影響を検討した。

II. 材料および方法

1. AFPの分離：ヒト臍帯血ブルー血清より、アフィニティー・クロマトグラフィーを用いて分離した。
2. T, T μ およびT γ リンパ球の分離：正常成人末梢血から比重遠心法で分離したリンパ球を、さらにGuptaらの方法の変法を用いて分離した。
3. 抗SRBC PFC反応：1 \times 10⁶個のリンパ球を1 \times 10⁵個のSRBCとともに15%ウシ胎児血清加RPMI 1640で、PWMの存在下に7日間培養し、その後カンガムのチェンバー内でdirect PFCの数として算定した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔結論〕

本実験の結果、リトコール酸の胎児肝におよぼす影響は、肝細胞毒としてのその破壊、肝内胆管の増生を認めたが、CBA にみられる特徴的所見は認められなかった。